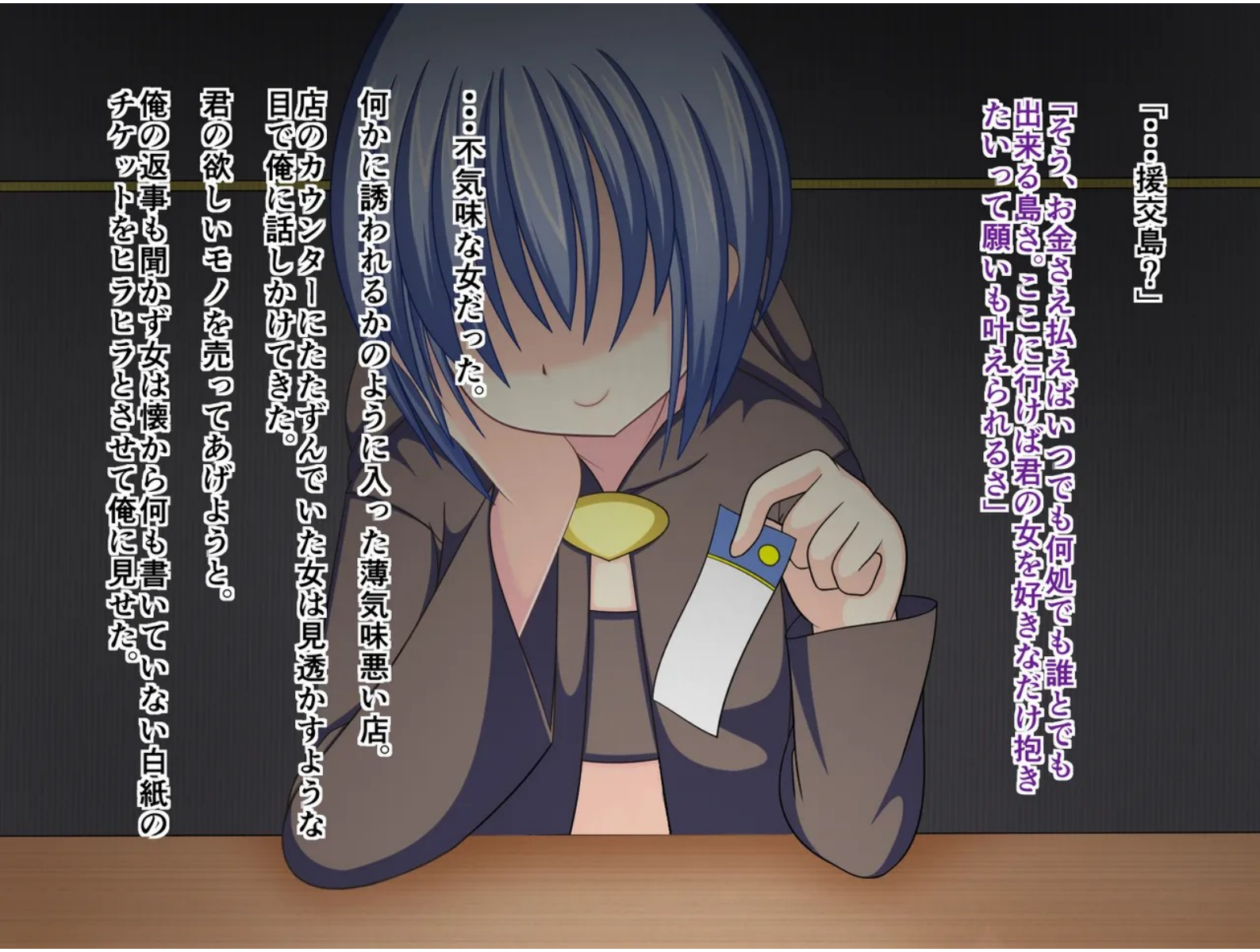
欲情したら何処でも誰とでも
中年おっさんの上で喜んで腰を振る
ムチムチ女の子にズプズプと・・・
援交島
～気に入った女の子とＳＥＸ三昧～


『…援交島？』
「そう、お金さえ払えばいつでも何処でも誰とでも出来る島さ。ここに行けば君の女を好きなだけ抱きたいって願いも叶えられるさ」
…不気味な女だった。
何かに誘われるかのように入った薄気味悪い店。
店のカウンターにたたずんでいた女は見透かすような目で俺に話しかけてきた。
君の欲しいモノを売ってあげようと。
俺の返事も聞かず女は懐から何も書いていない白紙のチケットをヒラヒラとさせて俺に見せた。

「ただし、島に入ってから一週間後の定期船で帰らなくちゃダメだよ。もし乗り遅れて帰れなかったら島の住人になっちゃうからね」
女は訳の分からないことを言っていたが俺の耳には入ってこなかった。
俺は魅入られるようにチケットを見つめていた。

あの女から買ったチケットで俺は今、援交島に来ていた。
半信半疑ながらも近くにいた可愛い娘に声をかけるが信じられないことに少し誘っただけで自分のようなおっさんに喜んでついて来る。
タダ同然の値段で俺の上で腰を振る少女。
名前も知らない男の上で快楽を貪るかのように必死に腰を振る彼女の姿に耐え難い興奮を覚えひたすらに腰を突き上げる。
ん♥
あ♥
ヌプッ
ヌプッ

「あっ、い、いい♪いいよっ♪おじさんのおちんちん、激しいよっ♪私の子宮、下からコンコンって突いてるの♪」
「まったく、知らないおじさんの上で喘いじゃうなんてエッチな娘だな。そんなにチンコが好きなのかい♪」
「だっておじさんのおちんちん硬くて気持ちいいんだもん。女の子ならみんな好きになっちゃうよ♥」
とろんとした目で俺を見る彼女は恍惚に満ちた表情を浮かべていた。
ん♥
あ♥
ジュプッ
ジュポッ

風俗やソープに行ってもここまで受け入れてくれる
娘はいなかった。
はぁ♥
・・・孕ませたい。
はー♥
俺のチンコを喜んで受け入れてくれているこの少女を
自分の精液で孕ませてやりたい。
ムクムクと気持ちが膨らみ、狙いを定めるかのように
子宮にチンコをぐりぐりと擦り付ける。
ひうっ♥
ジュポッ
ジュプッ

「中にっ！子宮に直接出すからなっ！」
「いいですよ♥中に出して♥この島に来た男の人は、女の子に好きなだけ中出ししていいんですからね♪」
あっ♥
あ♥
ん♥
あ♥
嬉しそうに微笑む彼女の顔に我慢出来なくなり、孕め孕めといいながら腰を押し付けた。
ジュポッ
ジュプッ

「あはっ♥お腹の中ぁ・・・熱い・・・♥
子宮の一番奥でびしゃびしゃって精液が叩いてるっ♥」
嬉しそうに子宮のあたりをさする彼女の顔を見て
出したばかりのチンコが再びムクムクと硬くなる。
「おじさんのおちんちんまだガチガチだぁ♥こんなに
凄いなら、ここの女の子達にモテモテになれますよ♥」
ん♥
あ♥
どぷっ♥
どぷっ♥

どうやらこの島に男というのはかなり少ないらしい。
現に俺も他の男とは会っておらず、この島の学校にいたっては女の子しかいない。
学校の空き教室で少女たちにチンコを舐めさせながらそんな事を考える。
れろっ
ぺろっ
ちゅ
ちゅぷ

他の子たちが授業を受けているというのにこの子達は必死に俺のチンコを舐めている。
まるで雛鳥が餌を奪い合うかのようにチロチロと舐めまわす舌にビクビクとチンコが震える。
もし自分に娘がいたらこのぐらいの歳だろう。
そんな少女たちにチンコを舐めまわされているという背徳感に言い知れぬ興奮を覚える。
れろっ
ちゅ
ちゅぷ

「ん…ちゅぷ…れろ…。ん…美味しい♥おじさんのおちんちん恥ずかしい味がする…♪」
「んっ、くちゅっ、れる…れろ♥ほんとだぁ♥おじさんのおちんちん臭くて美味しい♥」
れろっ
ちゅぷ
ちゅ

「こんなちっちゃい子におちんちん舐められて興奮するなんて変態なんだ♪」
「はっ、ちゅっ、むちゅ…はぁ、ぺろっ、ちゅぶ…♥あはっ♥ぴくぴくしてる。ちっちゃいお口でぺろぺろされて我慢できないんだ♪おじさんの変態ぃ♥」
れろっ
ぺろっ
ちゅぷ
ちゅ

『ん…じゅる、ごきゅ…ぢゅるる♥んっ♥いいよ、おじひゃん♥私のお口マンコにいっぱいだしてぇ♥」
「ああっ！出すぞっ！[redacted]ロマンコに沢山出すぞっ！」
れろっ
ぺろっ
ちゅ
ちゅぷ

「ん…ちゅる、ごきゅ…んん…♥
おじさんの精液臭くて美味しい♥」
「ああっ、いいな。私もおじさんの精液欲しい」
「ん、ぢゅるっ、じゅるっ♥おじさんのおちんちん
元気だもん、まだまだできるよね♪」
ちゅ
ちゃぷ
びく
びくっ
びゅるるっ♥

「おいおい、こんなおっさんのチンコで突かれて
そんなによがるなんてエッチな娘だな」
トロトロの膣壁は離さないとばかりにチンコを
締め付ける。
数時間前に会った男のチンコをこうも欲している
なんて、この島の女は誰も彼もドスケベらしい。
ジュポッ
ジュプッ
はぁ♥
はーー♥
ん♥
あ♥

「だ、だってぇ♥おじさんのおちんちん気持ちいいから。私がエッチなんじゃないもん♥」
「おまんこヒクヒクさせながらそんな事言っても説得力ないぞ。今だって俺のチンコ締め付けて離さないじゃないか」
ジュプッ
ジュポッ
はぁ♥
はーー♥
ひぅっ♥
ん♥
あ♥

「ち、ちがうもん。おじさんのおちんちんがいいからなんだもん」
「そんな事言ってチンコならなんでもいいんじゃないのか。最初からマンコぐしょぐしょに濡らしていたしな」
ジュプッ
ジュポッ
はぁ♥
はーー♥
ひぅっ♥
ん♥
あ♥

「そ、それはぁ…。お、おじさんのがき、気持ちいいからでぇ……」
「そっか、そっか♪それなら中出ししてもいいよな。赤ちゃんが出来ちゃうくらい子宮にドピュドピュって出しちゃってもいいよな♪」
ジュプッ
ジュポッ
はぁ♥
はーー♥
ひぅっ♥
ん♥
あ♥

「それに子宮も精液が欲しいって吸いだそうとしている♪」
「うん♪いいよ♪出して♥おじさんの精液で赤ちゃんつくって♥」
ジュプッ
ジュポッ
はぁ♥
はーー♥
ひぅっ♥
ん♥
あ♥

「っいいいいぃぃぃ♥ひぃっ♥ひぅっ♥でてりゅっ♥
んあああぁぁぁ♥♥精液でてりゅのぉ♥♥♥」
どぷっ♥どぷっ♥
はぁ♥
はー～♥
ん♥
あ♥
ひうっ♥

「ふふ、おっぱい気持ちいい？おじさんのおちんちん
私のおっぱいの中でビクビクってしてるよ」
「ああ、おっぱいむにむにして気持ちいいよ」

「んちゅっ…れろっ♥おじさんのおちんちん臭くて美味しい…♪」
「胸だけじゃなくて口でも咥えてくれ」
はぁ♥
はー♥
れろっ
ぺろっ

「…んちゅ…れろ、あむ♥…こう？これでいいの…？」
「そうそう、うまいぞ」
「んっ♥ちゅっ、ちゅる♥…じゅるるっ♥」
ちゅぷ
ちゅぷ
ぢゅぷ

「んっ♥おちんちん、お口の中でビクビクってしてる♥いいよ♪おじさんの精液、私の口にビュッビュ～って出して♥」
「んっ！出すぞ！全部飲んでっ！」
「んっ、んぐっ♥んんっ…♥…おじさんの精液すっごい濃い♥」
びくびくっ
ちゅぷ
ちゅ
びゅるるっ♥

「うおおぉぉっ！人妻まんこ気持ちいいっ♪」
まさか本当に子持ちの人妻とまでセックスできる
なんて思ってもみなかった。
いくら援交島といっても、はした金でここまで好き
放題できるとは。
ジュポッ
ジュプッ
ん♥
あ♥
はぁ♥
はー♥
あっ♥
あ♥

「待って！まってぇ・・・！ちんこ押し付けないでぇ♥」
「なんか変、へんなのぉ・・っ♥子宮が降りて来ちゃう♥
精液が欲しいって降りて来ちゃうのぉ♥」
「欲しいんだろ、いいぞ子宮の奥まで満タンにして
やる。そのかわり俺の子供を孕むんだぞ」
パーン
パーン
パン
ん♥
あ♥
はぁ♥
は～♥
あっ♥
あ♥

『はいっ♥孕みますっ♥孕みますからぁ♥
だから貴方の精液出してっ♥中でいっぱいびゅーってしてぇ♥』
「っ！ああ、出すぞっ！中に出すからなっ！」
パン
パン
パン
ん♥
あ♥
はぁ♥
はー♥
あっ♥
あ♥

どぷっ♥どぷっ♥
「あっ♥あっ♥あぁんっ♥いっぱい出てるっ♥♥♥
できちゃうっ♥赤ちゃんできちゃうっ♥」
「ふぅ〜、出した出した。チンコべとべとになっちゃまったな」
びゅるるっ♥
ん♥
あ♥
はぁ♥
はぁ〜♥
あっ♥
あ♥
びくっ
びくっ

「…んっ♥…じゅぷ♥おじさんのおちんちん
お母さんの味がして美味しい♥」
「…じゅぷっ♥…じゅるるっ♥…えへ♥粘っこい精液尿道まで残ってるよ♥」
はぁ♥
は～♥
ジュポッ
ジュプッ

「まったく、親子揃ってエッチだな。チンコを吸い付いて離さない」
「ぢゅるる♥・・・ちゅぶっ♥だっておじさんの精液美味しいんだもん♥」
はぁ♥
はーー♥
ジュポッ
ジュプッ

「お母さんにいっぱい出したのにまだビキビキしてる♥おじさん私のお口で興奮しちゃってるんだ♪」
「いいよ♪おじさんの精液ごっくんしてあげるから好きなだけ出して」
はぁ♥
はー♥
ジュポッ
ジュプッ

『んんぐゅ♥…じゅぶっ♥…じゅるるっ♥」
「おおおぉぉっ♪吸い取られるっ！」
『じゅぶっ♥…じゅるるっ♥んんぐぅっ♥」
「…っ！出すぞっ！全部飲めっ！」
はぁ♥
はー♥
どぷっ♥どぷっ♥
ちゅ
ちゃぷ

『・・・んっ♥・・・んぐっ♥ぷはっ♥どう、気持ちよかったおじさん♥』
「ふぅ・・・ああ、ありがとう気持ちよかったぞ」
はぁ♥
はーー♥
れろっ
ぺろっ

島に着いてから五日目。俺の方から誘わなくても逆に誘われるようになっていた。

誘ってくる娘は全員可愛いからこっちとしては問題などないのだが。

自分の方からタダ同然の値段で良いから抱いてくれなどと、どういう事なのだろうか。

気になった俺は誘ってきた娘に事情を聞いてみる事にした。

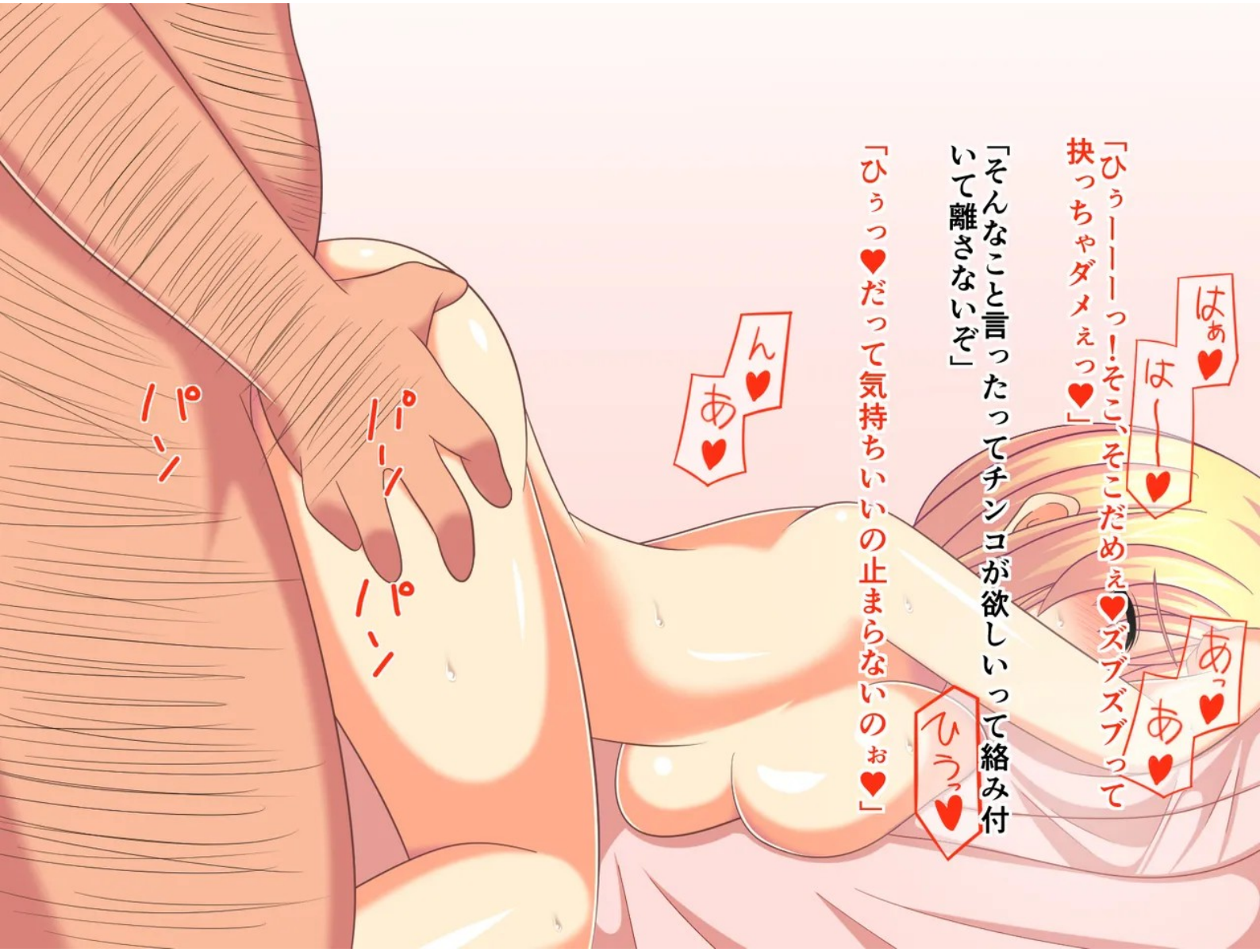
「・・・え？おじさんの事なら噂で島中に響いていますよ
すっごいおちんちんを持っているおじさんが来てるん
だって♪」
どうやら今まで抱いた娘たちが噂し、それが広まって
現在に至るらしい。
はぁ♥
はぁ♥
スリ♥
スリ♥

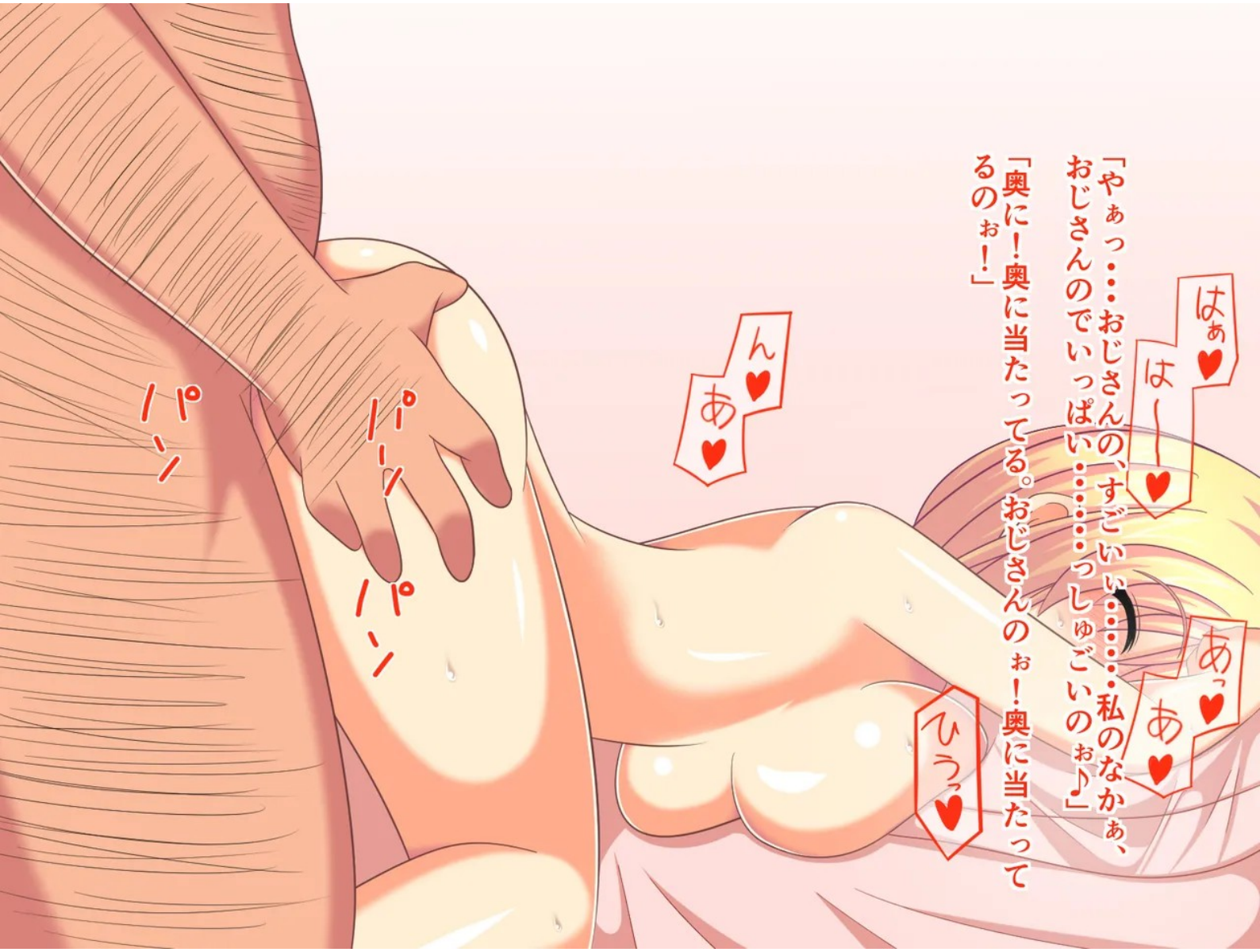
「んっ♥他にもおっぱいが好きだとか後ろから動物みたいにズンズン突くのが好きだって聞いていますよ」

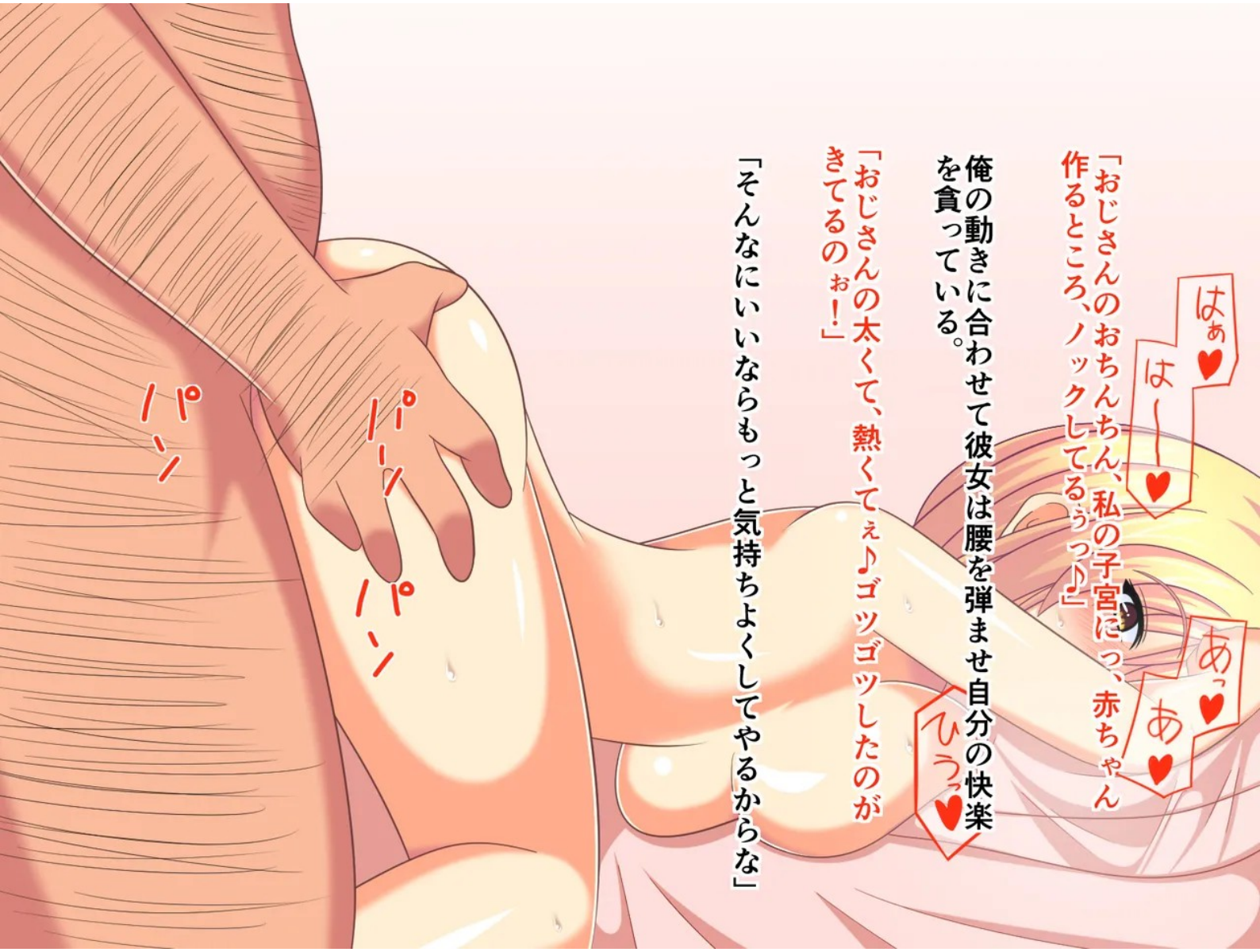
気づいたら性癖が周りにバレているなんて。
恥ずかしいのを隠すようにひたすらに腰を振る。

「あはっ♥おっぱいの中でびくびくしてるの分かりますよ♥いいですよ、私のおっぱいにビュッビュ～って射精してください♪」
「・・・っ！」
あっ♥
あ♥
はぁ♥
は～～♥
ひうっ♥
スリ♥
スリ♥

「…あっ♥…でてる…♥あったかぁい精液おっぱいの中でいっぱいビュクビュクって出てるっ♥」
あっ♥
あ♥
ん♥
あ♥
はぁ♥
はーー♥
ひうっ♥
ぞくぞく
どぷっ♥
どぷっ♥
びくびくっ


「ひぅーーーっ！そこ、そこだめぇ♥ズブズブって抉っちゃダメぇっ♥」
「そんなこと言ったってチンコが欲しいって絡み付いて離さないぞ」
「ひぅっ♥だって気持ちいいの止まらないのぉ♥」
はぁ♥
はー♥
あっ♥
あ♥
ひぅっ♥
ん♥
あ♥
パーン
パーン
パーン


「やぁっ・・・おじさんの、すごいぃ・・・・・・私のなかぁ、おじさんのでいっぱい・・・・・・っしゅごいのぉ♪」
「奥に！奥に当たってる。おじさんのぉ！奥に当たってるのぉ！」
はぁ♥
は～♥
あっ♥
あ♥
ひぅっ♥
ん♥
あ♥
パーン
パーン
パーン

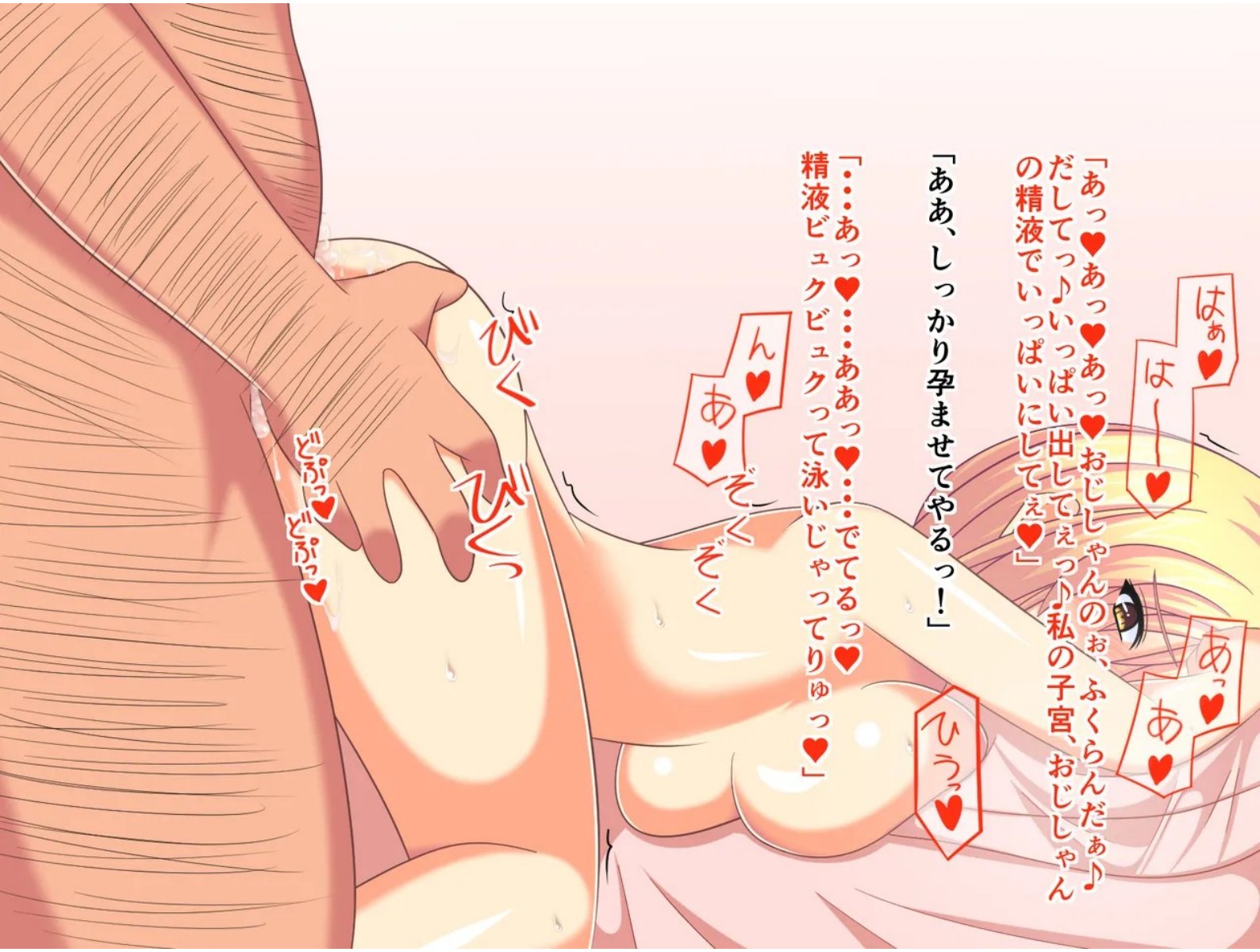


「おじさんのおちんちん、私の子宮にっ、赤ちゃん作るところ、ノックしてるぅっ♪」

俺の動きに合わせて彼女は腰を弾ませ自分の快楽を貪っている。

「おじさんの太くて、熱くてぇ♪ゴツゴツしたのがきてるのぉ！」

「そんなにいいならもっと気持ちよくしてやるからな」


「あっ♥あっ♥あっ♥おじしゃんのぉ、ふくらんだぁ♪だしてっ♪いっぱい出してぇっ♪私の子宮、おじしゃんの精液でいっぱいにしてぇ♥」
はぁ♥
はー♥
あっ♥
あ♥
「ああ、しっかり孕ませてやるっ！」
ひぅっ♥
「・・・あっ♥・・・ああっ♥・・・でてるっ♥精液ビュクビュクって泳いじゃってりゅっ♥」
ん♥
あ♥
ぞくぞく
びくっ
びくっ
どぷっ♥
どぷっ♥

「あんっ♥動物みたいに後ろからされるの好きぃ♪
おじさんのゴツゴツおっきぃおちんちん私のこと、
犯してるよぉ♪」
俺は学校帰りの学生をホテルへ連れ込みひたすらに
犯すように抱く。
ジュポッ
ジュプッ
はぁ♥
はーー♥
ん♥
あ♥
あっ♥
あ♥

「なかぁ♪またでてりゅ♥おちんちんじゅぼじゅぼ
動いてりゅ♪出しながら動いてりゅの♥」
「熱いのぉ♪おじさんのおちんちんいっぱい熱いのぉ♪」
ジュポッ
ジュプッ
はぁ♥
はぁ♥
ん♥
あ♥
あ♥
あ♥

すでに何度も出しているのに射精は止まらずひたすらに求めるように腰を振る。
「また出すぞっ！」
「うんっ♥だしてっ♥おじさんのドロドロ精子で子宮満たしてぇ♥」
ジュポッ
ズコ
はぁ♥
はーー♥
ん♥
あ♥
あっ♥
あ♥

「あはっ♥またぁ♪出てるぅ♪ビュクビュク子宮の中泳いでるっ♥やぁっ♥あんっ♥んっ♪いいよぉ♪おじさんの、すごいのきてるぅ♥」
「ひぅっ♥おちんちんいっぱい出したのにまだ硬い♪こんなにされたらおじさんの女にされちゃうよ♥」
どぷっ♥
どぷっ♥
びく
びくっ
はぁ♥
はーー♥
ん♥
あ♥
あっ♥
あ♥
ぞくぞく

「オマンコびちゃびちゃ濡れてヒクヒクしてるぞ、そんなに入れて欲しいのか？」
「んぁんっ、や、やぁっ、早く入れてぇ♥舐めるだけじゃいやなのぉ♥ウズウズして止まらないのぉ♥もう入れてぇ♥」
「しょうがない、そんなに入れて欲しいのなら入れてやるか♪」
はぁ♥
はー♥
ひぅっ♥
あっ♥
あ♥
クチャ
クチュ

「す、ごぉ……中に入ってるのわかるよぉ♥
……おじさんチンコおっきくて、くるしぃ♥」
「まったくこんなにやりたがるとはホントエッチだな♪」
はぁ♥
はー♥
ひぅっ♥
あっ♥
あ♥
ジュポッ
ジュプッ

「だ、だってぇ……♥おじさんのチンコゴツゴツ硬くて気持ちいい所に当たるんだもん♥」
「こんなの知っちゃったら、止まらないよぉ♥」
はぁ♥
はー♥
ひぅっ♥
あっ♥
あ♥
ジュポッ
ジュプッ

「あんっ♪んぁ♪へん♪へんらよぉ♪こんなっ♪
気持ちいいの、へん♪おかしくなっちゃうよ♥」
「まったく仕方ないな、それじゃあ出してあげるぞ。
・・・って聞こえてないかな」
「あ、あは♥でてりゅ♥おじさんの精子でてりゅのぉ♥」
はぁ♥
はー♥
ひぅっ♥
あっ♥
あ♥
ぞくぞく
どぷっ♥
どぷっ♥

あの女から言われた一週間、今日が最終日。
帰らなくてはいけないと分かっているのだが、
それでもこの島から出たくないという思いが
足を鈍らせ、女を抱かせる。
それによく考えれば島の住人になるということは、
ここで好きなだけ女を抱き続けることが出来るということだ。何も悪いことはないじゃないか。

「・・・おじさん考え事？腰止まっちゃってるよ」
「おおっ、悪い、悪い。ちゃんと気持ちよくしてあげないとな」
膣壁を抉るように止めていた腰を突き上げる。
自分の上で喘ぐ女の声を聞きながら先ほどの考えをとりあえず思考の端に置く。

「ひぅっ♥やっぱりおじさんのチンコ気持ちい♥
ずぶずぶ出たり入ったり気持ちいいよ♥」
女の悲鳴のような喘ぎ声を聞きながら、必死にヌプッ
抽送を繰り返す。
・・・余計な事を忘れるように。
ヌプッ
はぁ♥
は〜♥
あっ♥
あ♥
ひうっ♥
ん♥
あ♥
びくっ びくっ
ぞくぞくぞく

「あっ♪あん♪おじさぁん♪はやぃっ♪はやいよぉ♪
こんなにされたらわたしっ、もうダメぇ♪すごいの、
すごいの、きてぇ♪」
ヌプッ
ヌプッ
はぁ♥
は〜♥
あっ♥
あ♥
びくっ びくっ
ぞくぞくぞくぞく
ん♥
あ♥
ひうっ♥

急激な締め付けとともに女の膣に精を吐き出す。
どぷっ♥
どぷっ♥
「あ・・・あ、ぁ♥なかあつぃ♥おじさんの精子ビュクビュク泳いでるぅ♥」
・・・やっぱり手放す事なんて出来ない。
・・・・・・俺はこの快楽を手放したくない。
はぁ♥
は〜♥
あっ♥
あ♥
びくっ
びくっ
ぞくぞくぞく
ん♥
あ♥
ひうっ♥

最終日を過ぎて数日たった。
だが、あれから何の音沙汰もない。
やはり住民になるというのはここで一生過ごしていけるという事なのだろう。
俺はほくそ笑みながら叩きつけるように腰を振る。
これから好きなだけ女を抱けると思うとイチモツがさらに硬くなる。
パン
パン
パン
ん♥
あ♥
はぁ♥
はー♥
あっ♥
あ♥

「あは♪おじさんのカチカチちんこズプズプってオマンコ抉ってりゅ♪熱くて、硬くて、ぶっといよぉ♪」
「ひぅっ♪す、すごいよぉ♪さっきよりすごいの♥ああっ♪これ、すごっ♪すごい♪後ろからぁ♪おじさんのがずんずんってきてるぅ♥」
ん♥
あ♥
はぁ♥
はぁ♥
あっ♥
あ♥
パン
パン

「おっきいのがきてるの、あたしの中、わかるよぉ♪」
「あっ♪また、すごいのきてる♪イクッ！イクのぉ♪
おじさぁん、きてきてきてぇ♥」
パン
パン
パン
ん♥
あ♥
はぁ♥
はー♥
あっ♥
あ♥

「あはっ♥私の中、子宮の奥までいっぱい精子あふれてりゅ♥」
全てを吐き出すかのように精子を子宮に叩き付けた。
・・・・・だが射精すると同時にだんだんと意識が遠くなる。
どぷっ♥どぷっ♥
はぁ♥
はー♥
ん♥
あ♥
ぞくぞく
あっ♥
あ♥
びくびくっ

「・・・んっ？私どうしたんだっけ・・・・・」
・・・・・あれ？なんで女のような言葉遣いになってるんだろう。
ぼやけていた視界が少しづつはっきりとしてくると同時に自分の体に違和感を感じる。
はぁ♥
は～♥

「・・・えっ！なんだよこれ!?」
自分の視界に映る半裸の少女。これが俺の体なのか！
俺が目を覚ましたのに気づいたのか鼻息の荒い男が
こちらに近づいてきた。
はぁ♥
はー♥

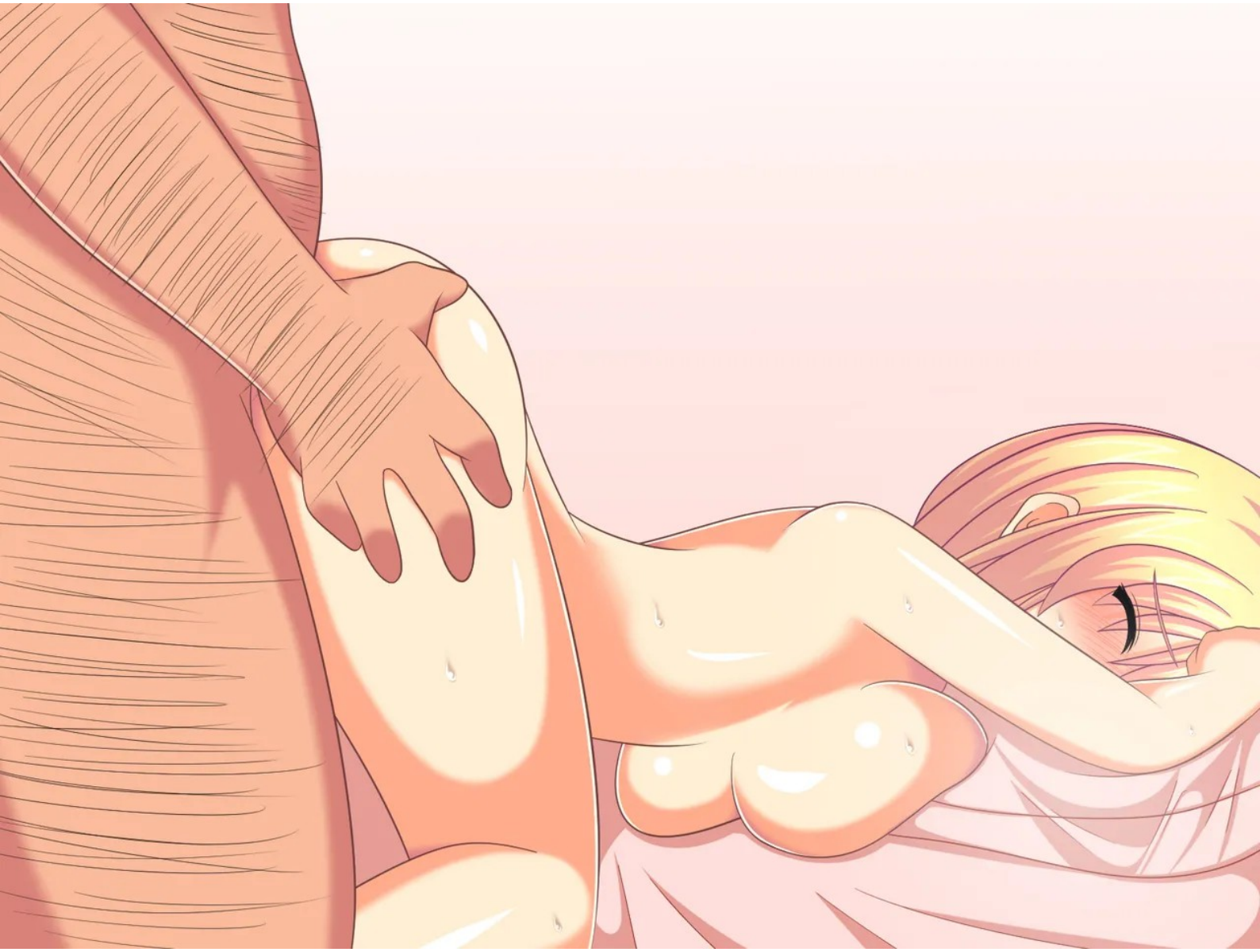
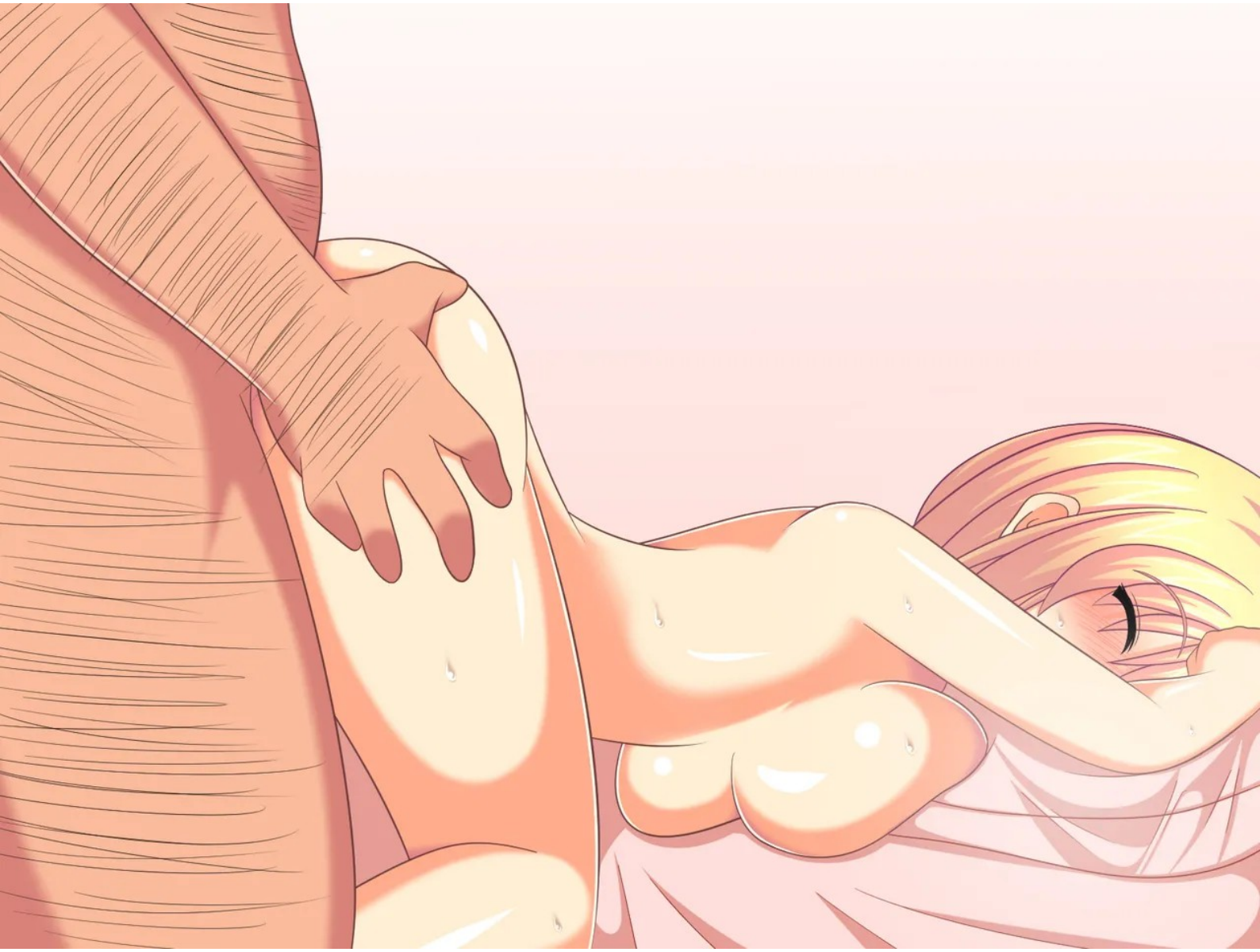
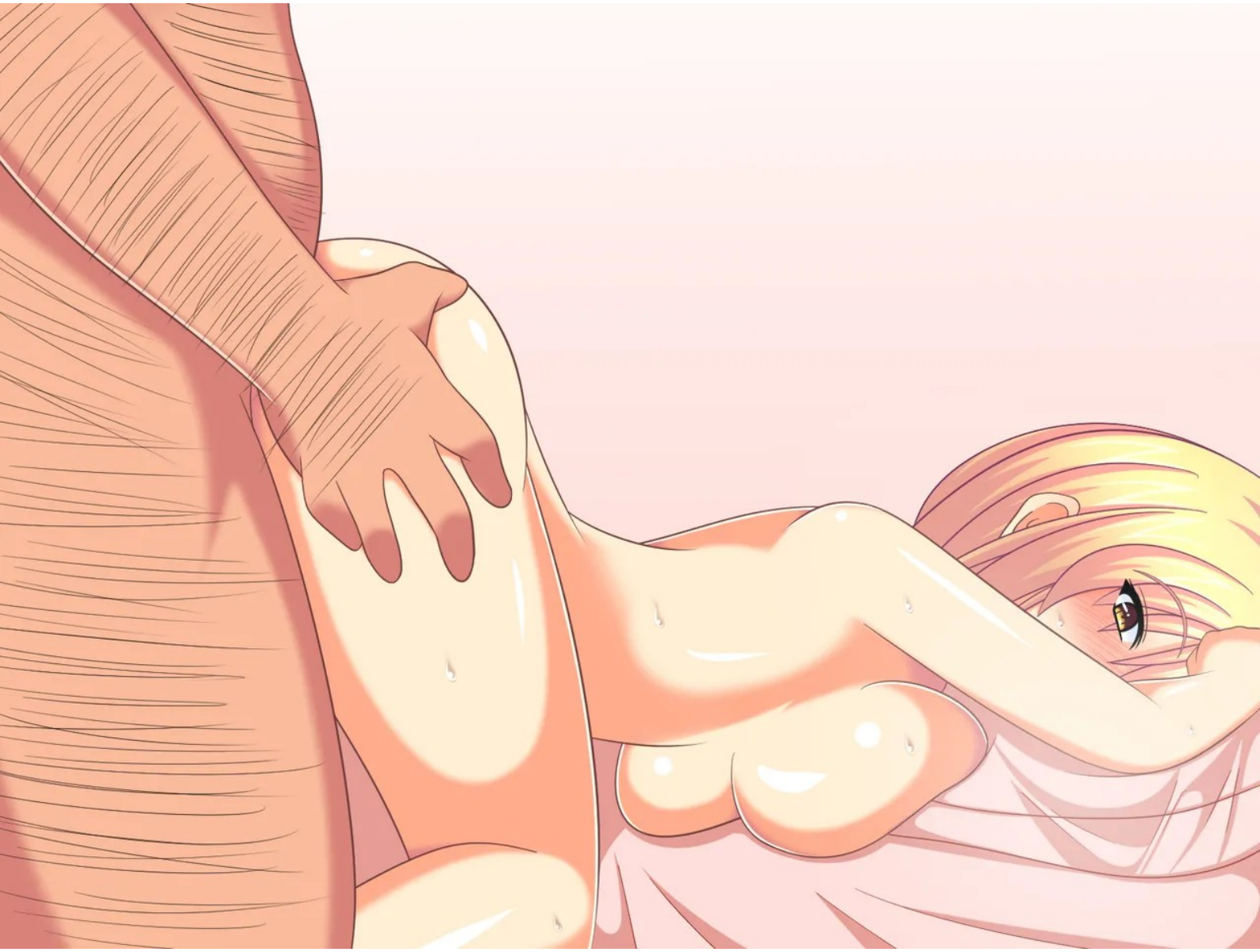
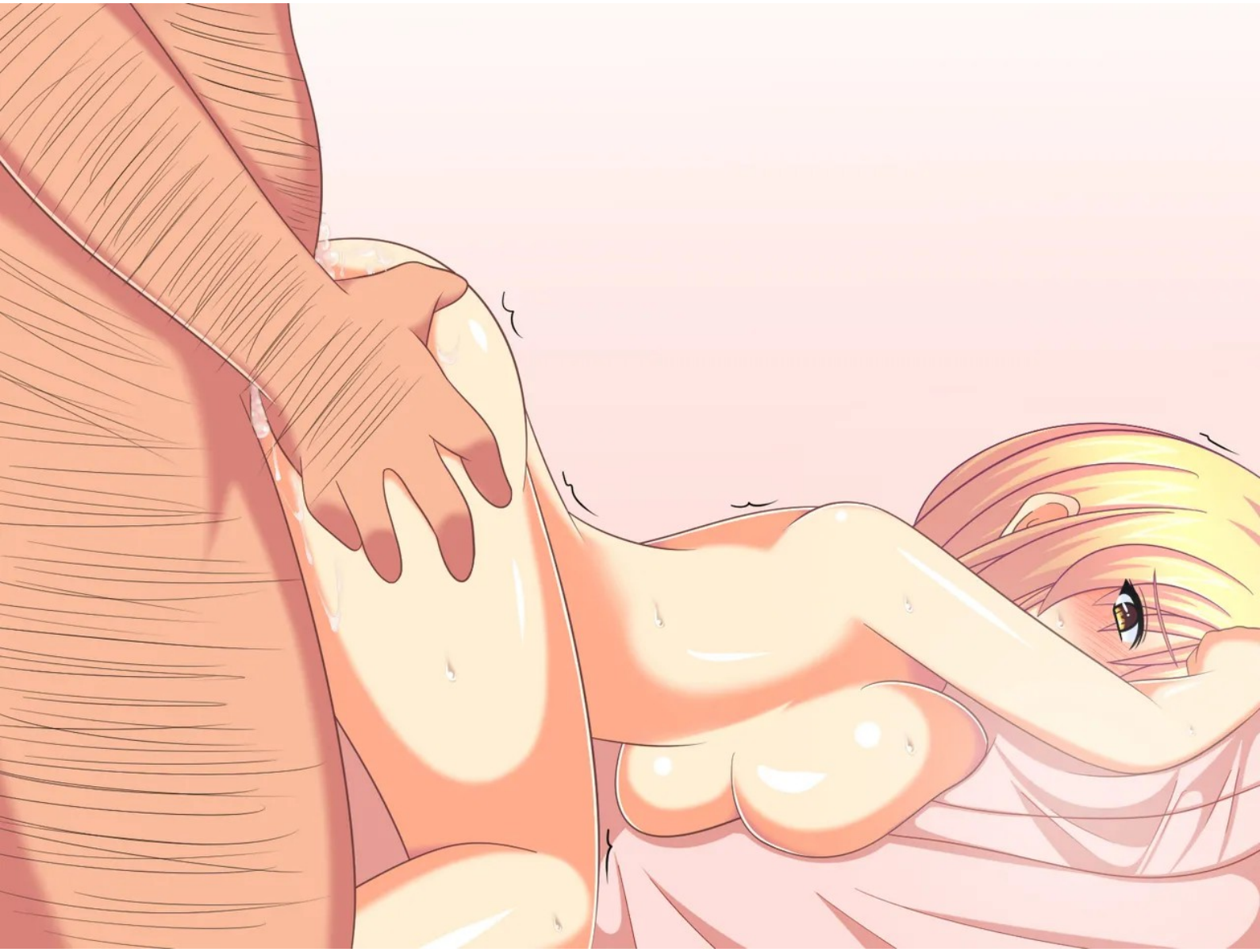
「ひっ♥なんだよお前・・・。こっちくんな！」
「ん？どうしたんだいいきなり。
・・・・・ああ！そうか、そういう設定なんだね」
はぁ♥
はーー♥
体にたいした力は入らず逃げようにも逃げれない。

「ひぐっ、入れるなぁ！入れるなぁ！」
「ははは、そんな事言ってもオマンコもうぐちゃぐちゃじゃないか。ここが良いんだろう♪」
「ひぐっ♥ま、まって♥突かないでぇ♥子宮コツコツしないでぇ♥」
一突きされるたびに自分の中の男が消えていくのを感じる。
ぞくぞく
ヌプッ
ヌプッ
ひうっ♥
あっ♥
あ♥

「いやぁ♥いやなのに気持ちいい……♥
気持ちいいのがとまらないよぉ♥」
体が女を受け入れ自分が作り変えられるような感覚がする。
はぁ♥
はーー♥
ん♥
あ♥
ぞくぞく
あっ♥
あ♥
ひうっ♥
ヌプッ
ヌプッ

「や、やめっ！ダメぇ♥おかしくなっちゃう♥」
「出すぞっ！しっかり受け止めろよっ！」
はぁ♥
はーー♥
ん♥
あ♥
ぞくぞく
あっ♥
あ♥
ひうっ♥
ヌプッ
ヌプッ

「うおおぉっ！搾り取られるっ！」
「あっ♥あああっ♥でてりゅ♥精子が子宮にでてりゅ♥
あはっ♥なっちゃたぁ♥女の子になっちゃたよぉ♥」
はぁ♥
はーー♥
ん♥
あ♥
びくっ
びくっ
ぞくぞくぞく
ひうっ♥
あっ♥
あ♥
どぷっ♥
どぷっ♥

・・・数週間後
いつかの私のようにおどおどと周りをうかがっているおじさんに声をかける。
「おじさん私と良いことしない♥」
「えっと、あの・・・」
「いいんだよ恥ずかしがらないで。この島の人はみんなエッチが好きなんだもん」
そう、女になってしまうほどに・・・。
ドキ
ドキ♥

あれから私は完全に女となった。
この島の住人になるという事は女としてこの島で生きるという事だった。
だけど私は何も後悔してなどいない。
だって、女になって男に抱かれるのがこんなに幸せなんだから。
END
ドキ
ドキ♥